

市販されているやや硬めのスポンジで作られたVパック歯科用のものを使用している。

3. 全身麻酔下でないと一般歯科治療が可能でない患者がいることはかねてより聞いているが、今までその依頼に対して満足できる処置ができなかったのは残念である。これからは可能ならば中央手術場で医学部麻酔科の管理下で処置して行きたいと考えている。

演題5 口腔領域の小児腫瘍に関する病理学的検討

○八幡 ちか子, 畠山 節子, 武田 泰典
鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

I 緒言

小児の病変は臨床的にも病理学的にも成人のとは異なりその診断にあたっては慎重な配慮が必要である。口腔領域の小児病変についても同様のことが考えられるにもかかわらず、これらの病変に関する臨床病理学的な検索は2, 3の報告をみるにすぎない。そこで我々は本学歯学部付属病院を受診し病理組織検査の行われた15才以下の症例について種々検討を加えているが、今回はそれらのうち腫瘍について報告する。

II 検索症例

検索症例は1970年1月1日より1981年6月までの過去11年6ヶ月間に当科で扱った15才以下の小児症例総数 232例で、今回検索の対象とした腫瘍症例は69例である。

III 結果

1. 腫瘍症例数は小児症例総数の29.7%に相当していた。

2. 小児腫瘍症例数の年齢別比較: 小児全検体数に対する腫瘍症例数の割合は年齢的に大きな差はなかった。

3. 顎骨腫瘍と軟組織腫瘍の発生数とそれらの年齢別比較: 年齢が増すとともに顎骨腫瘍の発生頻度が高くなる傾向にあった。

4. 腫瘍の発生部位とその組織型の比較: 顎骨腫瘍は39例で、そのうち歯原性のものが34例であり、軟組織腫瘍では血管腫がその大きな割合を占めていた。腫瘍を良悪性別にみると良性腫瘍は95.2%, 悪性腫瘍は5.8%であった。

5. 顎骨腫瘍について: 上顎では歯原性腫瘍が92.9%を占め、なかでも Odontoma が最も多くみられ

た。下顎では歯原性のものは、77.8%を占め、なかでも Ameloblastoma が最も多くみられた。

6. 歯原性腫瘍について: Ameloblastoma は8例のうち Plexiform 3例, Follicular 2例, Cystic 1例, 不明2例であった。Odontoma は11例中8例が Compound type であった。

質 問: 小川 邦明 (岩手県立中央病院歯科口腔外科)

1. 材料は摘出標本のみで Probe によるものは含まれていないか。

2. 臨床診断で腫瘍として別な疾患であったとか、逆に別の臨床診断で腫瘍と診断された所謂、誤診例はどの位みられたか。

回 答: 八幡 ちか子 (口病理)

1. 材料は生検および手術摘出物です。

2. その点についてはまた検索しておりません。これからは是非検索したいと思っております。

演題6 上顎洞癌に対する放射線治療, 化学療法および手術による治療成績の検討

○小松 賀一, 前田 光義, 松尾 芳明
今沢 優, 後藤 美智恵, 新里 真理
柳澤 融*, 関山 三郎**

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座

岩手医科大学医学部放射線学講座*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座**

我々は、上顎洞癌の治療に放射線、制癌剤の局所動注に手術を加えたいいわゆる三者併用療法を行ってきた。今回、その治療成績を分析検討したのでその概要を報告する。

対象症例は1970年6月から1981年5月までの40症例である。

腫瘍の占拠領域については、Öhngren 平面を基準として、これより頭蓋底に近い部分を侵すものを上方型、頭蓋底より離れた部分を侵すものを下方型とした。症例数は各々20例ずつであった。

治療はいわゆる三者併用療法で、放射線療法としては線源を Linac X線, Tel ⁶⁰Co を用い、総線量3000~6000rad であった。化学療法は殆どが 5-Fu を用い総量は2000~5000 mg であった。手術はいわゆる開洞によるネクロトミーを行なった。

治療成績を実測生存率、追加療法の有無別および長